

山本虎雄顕彰碑 除幕式



式次第

- 1.開会挨拶
 - 2.委員長代行挨拶
 - 3.除幕・義民太鼓演奏
 - 4.来賓挨拶
 - 5.経過報告
 - 6.閉会挨拶
- 記念写真撮影—

2021年5月21日

1928年青木村農民組合結成の日に因んで

山本虎雄氏の足跡

「昭和の義民」山本虎雄は一九〇二年、青木村田沢に生まれた。

深刻な昭和恐慌が農民を塗炭の苦しみにも陥れ、活発な農民運動を展開させるとともに、激しい弾圧を受けた時代。

一九二七年四月二十四日、長野県小作人組合連合会創立大会が開かれ、日本農民組合(日農)加入を決議するにあたり、上小地方組織化の中心的役割を果たした。
一九二八年、青木村青年会長となり、『青木時報』発行編輯印刷人を務める。紙面で、宝曆騒動や明治二年上田騒動を生権擁護運動、大衆的政治闘争と位置づけ取り上げた。

同年四月十四日、上小農民組合連合会の創立に参加。五月には青木村農民組合を結成して組合長に就任し、村税不当賦課抗議など村民の要求を掲げてたたかった。村を二分した小学校増築問題では、議論を建設場所に矮小化せず、男子補習学校を夜間授業にし教室の狭隘解消、軍国主義教育を進める青年訓練所の廃止、建設費などの義務教育費を全額国庫負担にすべきと主張した。「軍国主義教育反対」のビラは警察に没収されたが、ポスターを村内に貼り巡らして対抗し、村民世論を喚起して成果を収めた。

一九二九年一月の出初式で警察署長が「消防組の活動は、火災消火の役割だけでなく、赤い思想の火を消せ」と訓辞したこと端を発し、十一月から消防組自主化運動が始まった。年末には農民組合幹部や活動家が罷免されるなど不当な扱いを受けるも、「消防用器具・機械、法被は集落の財政で調達したもので権力の干渉を受けない」と主張し、翌年の出初式には警察官が取り囲む中を堂々と参加。警察の指揮監督下にあった消防組から村が支える組織であることを鮮明にした出初式となった。

一九二九年三月一日、上小農民組合連合会第二回大会において、事前検束され参加が叶わないが副組合長に選出される。山本宣治代議士の「無産党代議士の議會観」と題した当日の記念講演は満場を熱狂させ聴衆を魅了したが、四日後の三月五日夜、右翼の凶刃に倒れる。上小農民組合連合会は十日後、追悼大演説会を開き山本宣治記念碑の建立を決め、翌年五月除幕式を行った。

一九三〇年、農民組合結成当初からの要求であった青木村営巡回産婆設置事業が実現し、一九六八年まで四十年近く続き、女性と子どものいのちを守ることに大きく貢献した。

この間、上小ならびに近隣各地で頻発した小作争議に何度も駆けつけ、応援・指導した。

一九三三年二月四日、「二・四事件」が起こり、上小地方ではタカクラ・テルほか井沢国人(浦里村)ら農民組合の主要な活動家が検束された。影響の広がりを感じた権力は山本宣治記念碑の破壊を命令するが、別所温泉柏屋別荘旅館主 齋藤房雄氏の勇敢な機転で庭石として保存され、戦後の再建に結びつけた。

同年四月、衆望を得て青木村会議員に当選。

一九三五年、非常時体制を前にした中、産業組合専務理事に就任。

一九四〇年からの七年間は収入役に就く。満蒙開拓団募集の文書を棚上げし忘れないよう村長に進言したと、今なお語り継がれている。

一九四六年、戦後いち早く日本共産党に入党。青木村農民組合を再建し、土地管理組合を創設して農地改革を進めた。

一九五五年より十六年間、村民の切望に応えて再び村会議員を務め、森林組合や農協の理事、農業委員などに就く。学校給食の脱脂粉乳を生乳に替え、老人医療費の無料化、村議会の宴会廃止などを実現し、民主化と生活向上に尽した。

一九七一年、別所温泉安楽寺脇に山本宣治記念碑を再建し、これを機に長野山宣会を設立。事業の重要な役割を担い碑文を揮毫する。後に同じ地に建立したタカクラ・テル記念碑の碑文も執筆した。

上小地方の農民運動を中心とした社会運動の全貌をまとめた『長野県上小地方農民運動史』の刊行会会長を務め、一九八五年の発刊を見る。

一九八九年二月九日、農民運動を展開し、大きな足跡を残した同志たちと、哀歓交えて長野山宣会の発展を語る山宣会規約改正委員会の席上、不帰の人となった。

「平成の大合併」によって小さな村は次々に消え去った。しかし、青木村の村民は困難はあっても自主自立の道を歩み続けている。幕藩体制下の農民一揆から続く山本虎雄ら青木村村民の不滅のたたかいの歴史と業績が、今に生き続けている証といえよう。

茲に有志相計り、碑を建て志を偲ぶ。

ごあいさつ

—歴史の証しを語る山本虎雄氏の顕彰碑竣工にあたって—

山本虎雄顕彰碑建設委員長
高遠 和秋

長野山宣会の懸案事業であった山本虎雄氏の顕彰碑が建立されました。氏の業績を讃え、後々に伝えようと、青木村の有志の皆さんが石碑を準備してから、長い年月を経ての完成です。

ご遺族様のご理解、村を一望する最適地の提供を頂いた坂井弘様、事業に賛同と労苦を惜しまず奮闘された皆さんに心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

山本虎雄氏は農民と共に生まれ、村政の民主化、暮らしと権利を守り、平和を希求しました。いずれも優れた業績であり、顕彰碑として語り継がれる礎ができました。

この度の活動を通じて、何故青木村から百姓の蜂起が始まったのか、山本虎雄氏と仲間達の不屈な志を支え発展させた原動力など、今後の研究課題も浮かびました。

顕彰碑が多くの皆さんから関心を寄せられ、様々な分野で活用されれば至上の喜びです。

親族代表 あいさつ

山本虎雄長女 春日 静枝

コロナ禍のこの時期に、同志や村の方々に誉めていただき浄財までご寄付いただき、立派な碑を建立していただき恐縮に存じております。

父虎雄は、明治35年農家の長男として生まれ、農業に従事し、傍ら社会活動に参加。母千春は6人の子を育てながら、父の活動に協力し、愚痴もこぼさず送り出していたようでした。

今考えるに、昭和34年8月の台風で家が全壊し、村の方々に助けていただき大変ありがたかった事が思い出されます。

父は、同志の集会に出席するのが何より生きがかったように感じます。その席で突然体調を崩し生涯を終えることになりました。その際に皆様に大変お世話になりました。月日の経つのは早く、あれから33年経過。同志の皆様には父に代わってご活躍されることをお願いし、感謝の言葉といたします。

祝 辞

青木村長 北村 政夫

昭和の義民 山本虎雄氏顕彰碑ご竣工にあたり、心よりお祝いを申し上げます。多くの人々の熱き思いが集結し、国宝大法寺三重の塔隣接地に顕彰碑が建立されましたことは誠に意義深く、ご尽力いただいた関係者の皆様に深い敬意を表します。

「歴史とは何か？歴史とは現在と過去の対話である。現代に生きる私たちは過去を主体的にとらえることなしに、現在の、そして未来への展望を立てることはできない。」(EHカー) 今まさしく、複雑な諸要素が絡み合っているこの時こそ、昭和の農民運動や反戦平和のリーダーであった氏に学ぶことは多いのではないのでしょうか。江戸時代、己の死を覚悟で正義を貫き地域住民の生活を守った義民の精神を伝承し、戦前、満州移民への不参加を訴えるなど市井の人に尽くした山本虎雄氏の功績は、平成の合併に自主自立を貫いた青木村の一本の太い歴史の中で輝きを放ち息づいております。

この顕彰運動が多くの人たちに末永く継承されていくことを願っております。

事業概要

事業費 250万円 募金 250万円

経過報告

21世紀に入り、長野山宣会ならびに青木村有志の発案による山本虎雄顕彰碑建立の機運が高まった。故清水利益氏が山本虎雄をはじめとする農民運動の先駆者たちを「昭和の義民」と尊称し、故池内 巖氏によって碑とすべき青木村産出の石が選定された。

その後、有志が相次いで他界するなか、事業主体の確立や建設地の選定に手間取り、事業の進展を図れずにいた。

2020年、長野山宣会が顕彰碑建設を重要課題に位置付け、3月に生存中の氏を知る岩下光利氏や親族など関係者からの聞き取り調査を行ったことを皮切りに、国宝大法寺三重塔脇の土地を建設地に定め、8月に建設委員会を発足させた。以後、これまでに9回の建設委員会を行い、碑の揮毫を青木村長北村政夫氏に依頼するとともに、上小地域を中心に全国各地から浄財を賜り、碑の建立を見た。

施工業者

株式会社 小林石材
橋本工房

建設地 小県郡青木村大字当郷字西日向 1948番3